

高校野球のスタンドにどっしりと構える、学ラン姿のりりしい生徒たち。松本深志高校（松本市）の応援団管理委員会、通称「応管」が、近年では最も多い人数で、球児に熱い声援を送っている。3年生5人、2年生16人、1年生10人の計31人の大所帯。数年前は1学年で5人いれば「多い」と言われるほど志望者が減り、全校で仲間を応援するという伝統の継承が課題となっていた。（田中祥子）

深志高応援団 同志増えた!

規律見直し／校内でイベント

近寄り難さ払拭 大所帯に

背景には、応管に対する「規律が厳しい」「近寄り難い」というイメージがあったという。応管の生徒たちは、守るべきものは外見や形式だけではなく「仲間を全力で応援する」という理念だと考へ、間口を広げる方法を模索。校内で積極的に自主イベントを開くなど、開かれた背景には、応管に対する「規律が厳しい」「卒業生を含め、数年をかけて「応援した」という一番大事な心意気さえあれば、高年生らしい範囲で、髪色やネイル、化粧を維持したまま、応管の一員になれる雰囲気をつくった。一

中信予選決勝で、スタンドから声援を送る松本深志の応管の生徒たち(10日、セキスイハイム松本スタジアム)



本壘子団長(17)は「自分らしさを貫く分、それぞれが自分が高志生としてどう見られるかをより意識するようになった」と話す。

人数が増えたことで、伝統的な応管の力強く実直な応援スタイルに加え、身ぶり手ぶりと大きな声でにぎやかに一般生徒らをけん引する「盛り上げ隊」が発足。スタンドの熱量が高まった。吹奏楽の経験を生かし、らっぱ演奏でもり立てるメンバーもいる。隊長で3年の山本莉子さん(17)は「みんなで試行錯誤して3年目。今の応管が本当に楽しい」と笑顔を見せる。

16日から始まる県大会でも、仲間の勝利を信じてスタンドから声援を送る。